

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。

この十字架によって、

世界は私に対して十字架につけられ、

私も世界に対して十字架につけられたのです。

emi. de. **nh. genoito kaucaŝqai**

eivnh. en tw/staurw/ tou/ kuriou himw̄h Vhsou/ Cristou/

genoito aor mid 3rd sing

eivnh, *except, unless, if not* (MT 12.4);

kaucaŝmai Inf. pr. *boast*

悪い意味で ~ (自分の栄光を) 自慢する、高慢になる

良い意味で ~ (神にあって自信、確信を持って) ~ を大喜びする、心から喜ぶ、

(1) intrans.

(a) in a bad sense of self-glorifying

boast, pride oneself on (RO 2.23)

(b) in a good sense of an attitude of confidence in God

rejoice in, glory in, boast in (RO 5.11)

神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。(ロ - マ 5:2)

そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。(3)

私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいのです。

(11)

(2) trans. of achievements through divine help

boast about, glory in (2C 11.30).

しかし、

私にとっては、

私たちの主イエスキリストの十字架の中にあるのだという以外、自慢(誇り・大喜び)には断じてならない。

diVou-

emi. koŝmoj **estaurwtai**

staurōw pf.pass.sg.

lit. *nail or affix to a cross, crucify* (MT 20.19);

metaph. of a believer's renouncing his old sinful way of living to be united to his Lord

crucify, put to death, i.e. be done with (GA 5.24).

kagw. koŝmw̄ā

koŝmoj: 秩序と法則性をもって存在している自然、物質的な世界、さらには天と地のすべてを含む被造世界を意味しており、最も包括的な用語である(マタイ 25: 34, ヨハネ 1: 10, 17: 5, 使徒 17: 24, エペソ 1: 4)。とはいえ、そのおもな関心は人間に置かれており(マルコ 16: 15, ヨハネ 12: 25)、人の住む世界が中心的なイメージである(ヨハネ 3: 16, ローマ 5: 13, コリント 5: 10)。そこには異邦人も含まれる(ローマ 11: 12)。これはしばしば、地上的な関心の領域として(マルコ 8: 36, コリント 7: 31)、あるいは神に逆らう世界として否定的な意味で用いられる(ヨハネ 14: 30, ガラテヤ 6: 14, エペソ 6: 12)。

koŝmoj basically, *something well arranged*;

(1) *adornment, adorning* (1P 3.3);

(2) as the sum total of all created beings in heaven and earth *world, universe* (AC 17.24); (3)

as all human beings *mankind, humanity, all people* (MK 16.15);

(4) as this planet inhabited by mankind *world, earth* (MT 16.26; JN 11.9);

(5) morally, mankind as alienated fr. God, unredeemed and hostile to God *world* (1J 5.19);

(6) *sum total of particulars in any one field of experience, world, totality* (JA 3.6).

説教

ガラテヤ人への手紙は、ユダヤ主義者に反駁するために使徒パウロが書いた手紙です。

ですから、第一章の始まりから終わりの六章に至るまで、ユダヤ主義に対する論駁にひたすら終始しています。

ユダヤ主義者たちは、割礼を受けてモーセの律法を守らなければ救われないと主張していました。

使徒の働きには次のような記録があります。

「さて、ある人々がユダヤから下って来て、

兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われぬ。』と教えていた。」(15:1)

こうしたユダヤ主義者たちの意見は、使徒ペテロやバルナバまでも巻き込んでかなり強力に蔓延っていたようです。

初代教会のリーダー、使徒ペテロまでこの考えに影響されていたことを見ると、

そのままでは当時のキリスト教会全体を支配するかの勢いであったと推測されます。

それで、パウロは、ただひとり、キリスト教会をほとんど支配している一大勢力に立ち向かわんと筆を執ったのでした。

「割礼」とは、生まれて八日目の男子の包皮を切り取る儀式のことです。

神さまの契約の民であるしるしとしてアブラハムの時代に神さまがお命じになったものです(創 17:1-14, 23-27)。

元来、この割礼というものは、これを形だけ受ければそれで救われるというものではありません。

そうではなく、本来は、

ただ神さまの一方的な選びの恵みによって

救われた証拠として神さまがくださった、

言わば恵みの補助手段と言うべきものです。

それで、人は、この割礼という神さまの恵みのしるしを見るたびに、

自分のような者を一方的な恵みによって選んで救ってくださった神さまに心から感謝して謙るべきでありました。

そして、救われた喜びと感謝をもって神と人に仕えるべきでした。

それなのに、ユダヤ人たちは、そうすることなく、むしろ反対に、

あたかも自分たちが「割礼」を受けることによって機械的に救われているかのように

勝手に錯覚し、高慢になり、異邦人たちに対する優越感と特権意識に凝り固まっておりました。

そして、教会の中に幅をきかせているユダヤ主義者たちは、

このユダヤ人の誇りとしていた「割礼」をキリスト教会にまで持ち込み、

「割礼」を受けなければ救われぬ、という具合に主張したのでした。

これに対して、パウロは、あまりに神聖視されている「割礼」を目の敵にして徹底的に激しく扱き下ろします。

パウロの論点は、要するに、

「割礼」によって救われるのではない、

「律法」によって救われるのでもない、救いはただキリストの十字架による、というものでした。

「割礼を受けるか受けないかは大事なことでなく」、

「割礼」は救われるための条件ではない、

救いに至る条件はただ一つ、

それはイエスキリストを信じる信仰による、と言うのです。

私たち人間は、

神さまの前に墮落してあまりに罪深いため、

神さまにこれを行えと律法によって命じられても、何一つ行うことができません。

そりゃあ、人間の目にかなう程度であるなら、人目を誤魔化す程度には律法を行うことができるかも知れません。

でも、神さまの目を誤魔化すことはできません。

どんなに人目には完璧にできているように見えても、それは神さまの目にかなう程では到底ありません。

むしろ、罪に満ちたものです。

話にならない、罪だらけの者です。

ですから、律法によっては救われないのです。

「律法によって神の前に義と認められる者が、だれもいないということは明らかです。」とパウロは言います。(ガラテヤ 3:11)

そして、「律法の行いによる人々はすべて、呪いのもとにある」とパウロは言います。

(3:10)

それでは、

このような罪深い、そして自らの罪の故に神さまに呪われた私たちが、罪と呪いから救われる道はどこにあるのでしょうか。

それは、キリストの十字架です。

私たちの身代わりに罪の呪いを受けて死なれたキリストの十字架、そこに私たちの救いの道があります。

それは律法を行って自分の義を立てていく道とは全く正反対の道です。

自分は律法を行うことができないから、

キリストが自分の身代わりに十字架で死んで神に呪われてくださった、そのキリストの義を信じる義です。

キリストの義に寄り頼む義です。

キリストの義に寄りすぎる義です。

私の身代わりに神の命令に従い、

私の身代わりに神の呪いを受けて、十字架で死なれて、

この私に罪の贖いと永遠のいのちをもたらしてくださった、その神さまの憐れみをただ受け入れて信じる道です。

キリストの十字架によって世に顕された神さまの恵みを、ただ信じてそれに頼ってすぎるという道こそ、

罪深い私たちが罪と呪いから救われるための唯一の道だと使徒パウロはガラテヤ書で強調していたのです。

パウロは言います。

「人は律法の行いによっては義と認められず、

ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる」(2:16)。

ですから、パウロが見る時、ユダヤ主義者は断じて我慢がなりませんでした。

彼らは「割礼」や「律法」によって義と認められようとしています。

そのことは、「神の恵みを無にし」、「キリストの死を無意味にする」ものだと言います。

「キリストから離れ、恵みから落ちてしまった」と断罪します。(2:21,5:4)

それで、「その者は呪われよ!」「その者は呪われよ!」と二度も呪いの言葉を浴びせます(1:8,9)。

そして、遂には、それほど「割礼」したいと言うのなら、

「いっそのこと」包皮だけなどとけちくさいこと言わずに、

根元から「切り取っちゃえ!」とまで、実に激しく言い放つのでした。(5:12)

このような流れの締めくくりとして6章11節以降となります。

パウロは

「ご覧の通り、

私は今こんなに大きな字で、

自分のこの手であなたがたに書いています。」と強調しておいてから、

割礼主義者たちが人の義を立てようとして「割礼」を主張していることを批判して、それからパウロ自身の立場を表明します。

しかし私には、

私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。

この十字架によって、

世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。(6:14)

「しかし私には」：

たとえ周りの多くの人々が「割礼」を誇り、見栄を張り、肉の欲のままに生きていたとしても、

しかしパウロ自身は、誰がどう生きようと、誰に何と言われようと、「こう生きるのだ！」と力強く宣言するのです。

「**私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。**」：

この直訳は

「**私たちの主イエスキリストの十字架の中にあるということ以外、**

断じて自慢(あるいは誇り、大喜び)にはならない。」 となります。

パウロにとっての誇りは、自分が割礼を受けているということではありません。

自分が律法を守っているということでもありません。

そうではなく、「私たちの主イエスキリストの十字架の中にある」ということだと言います。

「キリストの十字架の中にある」ということ以外に自分の自慢すべきものはないと言います。

つまり、自分が神さまのお恵みの中にあるという事実だけが、パウロの誇りであり、自慢であり、喜びだと言うのです。

割礼にせよ律法にせよ、

自分が神さまのために何をしたかということではなくて、

神さまが自分のためにしてくださったこと、

それが一人でも多くの世の人々にパウロが自慢したい唯一のことなのだと言うのです。

思えばパウロほど人々に自慢できる才能の持ち主はいなかったと思われます。

割礼を受けたユダヤ人であることは勿論のこと、

それに加えて、ギリシャ語に堪能で、ローマの市民権を持ち、

律法に於いては最も熱心なパリサイ派に属し、

しかも当時最高の律法の教師とされたガマリエルに師事した一流の律法学者でもありました。

頭脳は優秀、しかも最も伝道熱心で、初代宣教師にもなり、

小アジアやヨーロッパに至るまで当時の世界宣教を一手に引き受けて世界各地に教会を建てました。

「私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。」(コリント 15:10)

こう本人も証言しているように、彼こそは初代教会最大の功労者と言えるでしょう。

ですから、自慢しようと思えばいくらでも自慢できたのです。

でも、それなのに、パウロは全然自慢しません。

むしろ、彼はこうきっぱりと断言します。

「私には、私たちの主イエスキリストの十字架の中にあるということ以外、断じて自慢にはならない。」

どうしてでしょうか。 どうして十字架の中にあるということ以外に自慢できないのでしょうか。

なぜなら、すべて「神の恵み」(コリント 15:10)であるからです。

「それは私ではなく、私にある神の恵み」であるからです。

それなのに、どうして人に自慢することができるでしょう。

「だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。」(ガラテヤ 6:3)

「この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」 :

パウロは世に対して殺された者のようになり、世もパウロに対して殺された者ようになったと告白します。

死んだ、殺された、磔にされて殺された、それでこの世とは全然関係なくなりました ~ 死んだんですから。

つまり、パウロは生まれながらの古い自分と完全に決別したのです。

それまでは世の事々の中で生きていました。

この世の名誉や宝に寄り頼み、この世の古い生き方である肉によって生きていました。

でも、そういう古いこの世的な価値観や生き方に対して死にました。

ですから、「割礼」に象徴されるこの世的な誇りや自慢はパウロにとってどうでもよいものとなりました。

パウロの誇りはキリストの十字架の恵みにより救われたというただその一事です。

私たちも同じではないでしょうか。

私たちには、いろいろな才能や社会的立場、財産、人望、人脈、学歴、功績があると思います。

でも、一皮むけば、パウロの言葉通り、実は何もありません。 ~死ぬ時は何も持って行くことはできません。

誇れると思っていたことも、実は大したことがない、自分だけの誇りで、誇れるようなことではない、

たとえ誇れることであったとしても、それも神さまが恵みによって与えてくださったものであるとすれば、

いったい、私たちには、自分のもので人に自慢することのできるような何かがあると言えるのでしょうか。

実は、何も無いんです。

誇れるものはありません。

人に自慢できるようなものはないんです。

あるのはただ神さまの恵みです。

キリストの十字架の恵みです。

神さまがただで与えてくださった、キリストの十字架による救いの恵み、それだけです。

信徒だろうが、役員だろうが、牧師だろうが、最後に残るのは、「**キリストの十字架の中にある**」というそれだけです。

罪深い私たちを地獄の滅びから救い出すキリストの十字架の恵みこそ、私たちが誇りうる唯一絶対の宝物です。

この恵みを持たない方は、今この時、イエスさまを信じて救いに預かり、

既に救われた者は、この恵みをいつも確認しながら、
喜びと感謝をもって謙遜に神と人に仕え、この恵みを人々に証して神の栄光をあらわされるよう聖名により祈ります。